道徳ジャーナル

現代的な課題 **多様性特集号**

116号

●21世紀　心の時代に
自分の色を出せるピアニストに
西川悟平……1
●道徳授業　私の実践
・一人一台タブレット端末を活用した道徳科の授業実践
我妻友美……4
・「心に響く道徳教育」～全校一斉道徳の実践～
佐々木悠介……5
●SDGs×道徳　……6
●どうなるこれからの道徳授業……10

21世紀 心の時代に

自分の色を出せるピアニストに

夢の途中で

ピアノを弾くとき、七本しか動かない僕の指。ジストニアという脳神経からくる難病で、ピアノに向かうときだけ指が固まります。

僕は、十五歳という遅いスタートでピアノを始め、猛練習して音大に進学。二十四歳のとき、来日していたアメリカのピアニストにスカウトされ、ニューヨークに渡りました。

その後、リンカーンセンターでデビュー、カーネギーホールで演奏会を開くなど、ピアニストとして夢と希望にあふれていたのです。

そんなときにジストニアの発症。医師から「もう一生ピアノは弾けない。」と言われ、「人生終わった……。」と絶望しました。

どん底の日々。そんなある日、手伝っていた幼稚園で、子どもたちに「ピアノ弾いて！」と言われたのです。当時動く指は五本。僕は（指遣いがヘンでもいいや）と開き直り、「きらきら星」を弾きました。

すると、みんなが「きれ～い。」と喜んで踊り出して……。僕は、電気が走るような衝撃を受けました。この子たちは素直に音を感じて、楽しんでいる。指がどうとか関係ない。「五本しか動かない」じゃなくて、動く指で弾けばいいんだ。

それから訓練を重ね、三分ほどの曲を七年かけて習得。指も右手五本、左手二本が動くようになり、「七本指のピアニスト」になりました。

東京でオリンピックとパラリンピックが開催されると知ったとき、「開会式と閉会式でピアノを弾きたい！」という夢が生まれました。

ピアニスト
西川悟平（にしかわ ごへい）

東京パラリンピックの閉会式

僕はニューヨークでピアニストとしてこれからというときに難病になり、もう無理だと言われたけれど、挫けずに頑張ってきた。そんな僕がオリンピックで演奏することで「最悪の状況からでも最高の舞台に立てる」というメッセージを発信できると思ったのです。特に、次世代の子どもたちに伝えたいと思いました。

まず、アメリカのニュース番組やヨーロッパの演奏会などで「オリンピックで弾きたい」とアピール。携帯の待ち受け画面も、東京オリンピックのエンブレムにしていたほどです。

さまざまな人に思いを伝えた甲斐もあり、二〇二一年の六月に「パラリンピックの閉会式でピアノを弾いてほしい。」というオファーが！

曲は、ルイ・アームストロングの「What a Wonderful World」。大好きな曲です。一音ずつ思いを込め、毎日何時間も練習しました。

二〇二一年九月五日、東京パラリンピックの閉会式。僕の演奏はフィナーレです。

自我は忘れ、他の歌手や演奏家の方、合唱の子どもたちとの調和を大切にしようと心がけました。みんなの表現を活かす音になるように。

緊張しながらも夢の中にいたような八分十一秒。最後は僕のソロ演奏で聖火台が閉じました。

このとき、とても嬉しかったことがあります。それは、僕が「七本指のピアニスト」と紹介されなかったこと。ただ純粋に僕の弾くピアノの音色が、全世界百六十か国、二億五千万人の人たちに届いていたのです。

閉会式で弾いたあと、うつ病やひきこもりの子どもたちがコンサートに来てくれるようになったのも、とても嬉しいことでした。

二人組の泥棒

パラリンピック後、友人や知人から何百件もメールが届き、その中に「とても良かったよ。」と忘れられない人からのメールが。以前、僕の住むアパートに強盗に入ってきた泥棒です。

二〇一六年の一月、僕はニューヨークのアパートの高層階に住んでいました。気を抜いて玄関の鍵をかけていなかったところ、夜十時頃、ガチャリとドアが開き、入ってきたのは二人組の男。黒人の男がいきなり僕に注射器を突きつけ、ラテン系の男がカードやパソコンを奪っていこうとしました。

殺されるのかと、恐怖で震えました。しかし、両手を上げて様子を見ているうちに、好奇心が湧いてきたのです。（どんな子ども時代を過ごしたら、人の物を盗むような大人になるのだろう。）

恐る恐る聞いてみると、ラテン系の男がこう言いました。

「四歳から父親にいじめられ、母親もめちゃくちゃ。両親に捨てられて俺はホームレスになったんだ！」

僕は涙があふれました。もう何を盗られてもいい、ハグしたいという思いに。家にある日本茶を飲むか聞くと、飲むというので淹れることにしました。僕たちは日本茶を飲みながら、夜明けまで話しました。

部屋に貼った僕のポスターを見た黒人の男が「お前、カーネギーホールで弾いたのか？」と聞いてきました。「僕が弾いたのは小ホールなんだ。有名なのは大ホール。」

泥棒たちは、今まで一度もコンサートに行ったことがないと言いました。

さらにラテン系の男が、今日は誕生日だと言うのです。朝の四時でしたが、ピアノで「ハッピーバースデー」を弾きました。「人生で初めて、誕生日をピアノで祝ってもらった。」と、男は泣いていました。

結局何も盗らず、暖房器具の修理までしてくれた泥棒たち。僕は二人と約束しました。

警察には通報しないから、何か仕事を見つけ

ること。僕がいつかカーネギーホールの大ホールで演奏できる日が来たら、VIPとして彼らを招待すること。

泥棒たちは、「おい、鍵はちゃんとかけろよ。」と言い残して去っていきました。

その年のクリスマス、僕はカーネギーホールの大ホールで、ゲストとしてソロ演奏することになりました。練習に明け暮れていたある日、「僕らはまだ招待されてるかい?」というメールがきたのです。連絡先を交換していた泥棒からでした。ポスターを見た、と。

僕は驚き、そして少し怖くなって支配人に相談すると、「ゴヘイ、約束は守るべきだ。」と、VIP席を用意してくれました。

コンサート当日、泥棒たちはスーツ姿でやってきました。約束どおり、仕事についていたのです。最高のVIP席で僕の演奏を聞き、終わったあと「本当にありがとう!」と、長いお礼のメッセージが届きました。

舞台化されて

まるでドラマのようなこの話を、コンサートで話したところ、あるプロデューサーの方から舞台化したいというお話をいただきました。

こうして、二〇二二年の七月、東京・池袋の劇場で「七本指のピアニスト〜泥棒とのエピソード」として上演されました。主役の僕を演じたのは、EXILE(エグザイル)の松本利夫さんです。

僕は最初の本読みだけ参加して、自分の感じたとおりに演じてほしいと伝えました。同じ表現する者として、創り上げていく過程や思いを大事にしてほしかったのです。

コロナ禍の中、一日の休演もなく、大成功しました。千秋楽のスタンディングオベーションで、僕は大号泣。あの感動は忘れられません。

僕にしか出せない音を

僕は、言霊(ことだま)ともいうべき「言葉の力」を信じています。パラリンピックも「弾きたい!」と声に出して、夢がかなないました。言葉の力が奇跡を呼んで、前へと進めたのです。

また、世界各国で演奏し、いろんな人種の人たちと触れ合って感じることがあります。

「私はこう思う」という自己主張も必要だけど、「あなたはどう?」という視点がとても大切だということ。ポジティブ思考はいいことですが、人に強要するものではありません。辛(つら)いときは「しんどい」と口に出していいし、できないことは補い合っていけばいいんだと思います。

僕の七本指は、超絶技巧の完璧な演奏はできません。でも、一音一音、僕にしか出せない深い音色を届けられると信じています。

(取材・文/古藤ゆず)

写真/Masaaki Toyoyoshi Style Photos

道徳授業 私の実践

一人一台タブレット端末を活用した道徳科の授業実践

山形県上山市立南小学校教諭
我妻　友美

授業の概要

○主題名　本当の友達
○内容項目　友情、信頼
○教材名「泣いた赤おに」（『新・みんなの道徳　4』学研）
○ねらい　赤おにと青おにの思いを多面的・多角的に捉えることを通して、本当の友達について考え、友達と思い合う大切さを理解し、よりよい友達関係を築こうとする態度を育む。

授業の実際

【導入】
○事前アンケートの活用。

「あなたの考える友達とはどんな人ですか」という事前アンケートの結果を紹介し、価値への方向づけを行った。
○パワーポイントを用いて、紙芝居風の読み聞かせで内容の理解を助ける。

赤おにと青おにの会話や挿絵を紙芝居風にしたパワーポイントを使用して、教材文を読み聞かせた。教材文のみでは理解が難しい児童も、電子黒板の大きな画面に映し出される教材に集中し、作品に入り込む姿が見られた。

【展開】
○赤おに、青おに、それぞれについて考えさせ、相手に対する友情の深さを多面的・多角的に考えさせる。

発問　**二人についてどう思いましたか。**

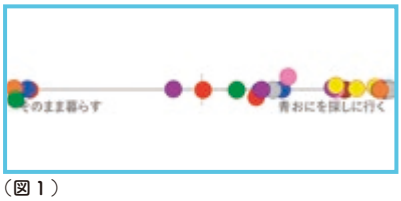
子どもたちは、二人とも優しいおにだと考えていたが「青おにのほうが友達思いだ」という意見も多かった。「赤おには、人間と仲良くなるより、自分を大切にしてくれる青おにをもっと大切にすべきだった」という意見も出た。
○「SKYMENU」のポジショニング機能を使って、考えの揺れ動きを可視化し、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めさせる。

発問　**自分が赤おにだったら、この後、どうしますか。**

子どもたちは、課題を自分事として捉え「そのまま暮らす」か「青おにを探しに行く」か、自分の考えをタブレットにマーカーで示し、理由をコメント欄に書き込んだ。その後、全員の考えを表示し、議論した。全体交流では当初、「青おにを探しに行く」という考えが多かったが（図1）「そのまま暮らす」という考えを聞いて、自分の考えが揺さぶられている児童が見られた。（図2）

ポジショニング機能では、議論の中で考えが変わった場合、何度でもマーカーを再配置することができ、結果がリアルタイムで反映される。全員の立ち位置が把握できるだけでなく、考えの揺れ動きが可視化され、全体で共有できる点が効果的であった。

教員用端末ではマーカーの移動量が確認できる。変化の大きい児童や、揺れ動きがありながらも当初の考えに戻った児童の考えを聞き、議論を深めた。



（図1）

（図2）

【終末】
○端末の発表ノートに「本当の友達」についての考えを書き、共有する。

子どもたちは「本当の友達」を、
・離れていてもずっと大切な人
・お互いに思い合っている人
などと書き、考えを深めていた。発表ノートを画面で一覧表示した。ノートをPDF形式で保存し子どもたちと共有すると、授業後も友達のノートを読み、自分の考えを見つめ直す様子が見られた。

（わがつま　ともみ）

道徳授業 私の実践

「心に響く道徳教育」
～全校一斉道徳の実践～

愛知県弥富市立
弥富中学校教諭
佐々木　悠介

全校一斉道徳の実践

私が担任していたクラスで、生徒から「大人って、どうなったら大人なのですか？」という疑問の声が上がった。生徒たちは、「二十歳になったら」「自分で生活できるようになったら」など自分の知識と経験をもとに話し合っていた。

「人に何かを与える存在になったら大人、もらうだけなら子ども」。ある生徒の発言に他の生徒は納得し、何より私がいちばん感心した。その場でしか生まれることのない言葉だったと思う。

生徒たちと一緒に考え、共に成長したい。関わった生徒たちに何かを与えられる存在になりたいと思い、日々の実践をしてきた。

道徳的な価値を学ぶとき、実際にその道で頑張っている人の言葉は格別に説得力があり、生徒に響くことが多い。

本校では年に二回ほどゲストティーチャーを迎えて全校一斉道徳を行っている。この取り組みを始めて六年になる。午前の一時間は、その人の紹介や同じ内容項目の自作教材で授業を行い、午後にゲストティーチャーを招いて講話を聞き、インタビュー形式で授業をする。有名人だけでなく、地域で頑張っている方も招くようにしている。

過去には、「生命の尊さ」をテーマに、交通事故で中学生の娘を亡くした母親、「克己と強い意志」をテーマに、元オリンピック金メダリスト、「思いやり」をテーマに、いじめを苦に自殺してしまった中学生の父親など、さまざまな人に来ていただいた。「節度、節制」をテーマに、かつて違法薬物の所持で収監された方々に来ていただいたこともあった。

今年度は「よりよく生きる喜び」をテーマに、午前に「箱根駅伝に挑む」という教材で授業を行った。長い人生を生きていく上でいろいろな選択肢があることを話し合い、競技を続けるかやめるか、など、自分事としてよりよい生き方を考えた授業だった。

午後は、地元出身でマラソン選手として活躍している神野大地選手をお招きした。箱根駅伝で「山の神」と呼ばれた神野選手に、半生を振り返りながら、箱根駅伝で優勝に至るまでの苦難や努力、仲間や監督との絆、チームとは何かを話していただいた。後悔をしないためにどう生きるか、と話す神野選手に、子どもたちは真剣に耳を傾けて聴いていた。

今後の夢や展望、当時の裏話なども交えた話に、「よりよく生きる」ために何が必要かを考えることができ、実り多い時間となった。

映像などを使って分かりやすく話す神野選手

おわりに

道徳科の授業の終末では、生徒と振り返りをして、気持ちの変容を見ている。全校一斉道徳を行った後は、考えがさらに深まっていることがよく分かる。それだけ講師の先生方の話が響いているということだが、普段の授業でも同じように深めることができたらと思う。工夫を凝らして今後に生かしていきたい。

（ささき　ゆうすけ）

〈対談〉

SDGs×道徳　連載第十二回

SDGs×多様性

認定NPO法人ReBit　事務局長　中島　潤

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）　理事　木村　大輔

多様性について子どもたちと考えるとき、学校で取り組めることや配慮すべきことについてお話を伺いました。

自分の内面にある多様性に気付く

司会　ReBit、GiFTの多様性に関する取り組みについてお聞かせください。

中島　ReBitの活動は、大別すると教育とキャリアという二つの領域に分けられます。共通事項として「LGBTQを含めたすべての子どもがありのままで大人になれる社会」という目標を掲げています。

　教育事業では、出張授業や先生方への研修を行っています。しかし、私たちが直接学校を訪問するには限界があるので、授業で活用できる教材セットを制作し、無償提供しています。

　教育事業に長年取り組んできましたが、子どもの課題が解消されたら、子どもたちはありのままで大人になれるのか？　と考えたときに、大人になってからも自分らしく働ける環境がなければ難しいのではないかと感じ、キャリア事業を展開しました。主に企業向けの研修やコンサルティング、障害がある方へ向けた就労移行支援事業を行っています。LGBTQだけでなく、発達障害、介護、がんといったテーマも取り扱い、多様な人が自分らしく働ける職場を考え、実現するお手伝いをしています。

木村　GiFTもReBitの皆さんに近いことを行っています。立ち上げから十年目を迎えますが、最初に掲げたビジョン「多様性の中から新しい価値を生み出す」をずっと大切にしてきました。よりよい社会をつくる意識や志を持つためには、互いを深く知ることが重要です。そのために多様性の理解が必須であると考え、学校や企業への教育活動を行っています。最も大切にしていることは、対話の時間です。研修やワークショップの冒頭では、参加者の生い立ちやこれまでの物語を共有する時間を設け、必ず心のつながりをつくるようにしています。

　LGBTQだけでなく、国籍や宗教観、さらに広げれば価値観や生き方にも多様性があります。一人一人の多様性について、深いレベルまで理解し合うことを大切にしています。また、自分の中にある多様性にも気付いてほしいと思っています。「自分の中にいろいろな自分がいる」ことや、「一緒にいる人の一部分しか見ていなかった」ということに気付いてもらえる研修を心がけています。

自分を大切に、他者も大切に

司会　多様性に関する教育活動を行う中で、子どもたちの様子や変化について感じることを教えてください。

中島　木村さんのお話にあった、自分の内面にある多様性という点は、私たちが行う出張授業でも大切にしています。授業では「多様な性から多様性へ」を合言葉にしていて、他者だけではなく自分自身にも多様性があるということに

気付く機会をつくっています。

授業の教育効果について調査をするために、子どもたちに「いろいろなちがいを大事にするために、あなたができる工夫はどんなことですか？」というアンケートを実施しました。結果を分析して五つに大別したところ、最も多かったのは「自分らしさを大切にする」「自分のすきや得意を大切にする」という意見でした。その後に、他者の尊重、違いを受け入れる……などが続いています（下図）。私たちの授業が、自分自身の多様性に気付くきっかけをつくっていることが分かりました。

授業ではＬＧＢＴＱやアライ[*1]の講師が、自身の生活やこれまでの歩みを一人のロールモデルの話としてお伝えします。その話を聞いて「ＬＧＢＴＱの人は大変だな」ではなく、自分と同じ部分や違う部分を見つけ、自分はどのように生きていきたいかについて考えるきっかけにしてほしいと思っています。

中島潤さん

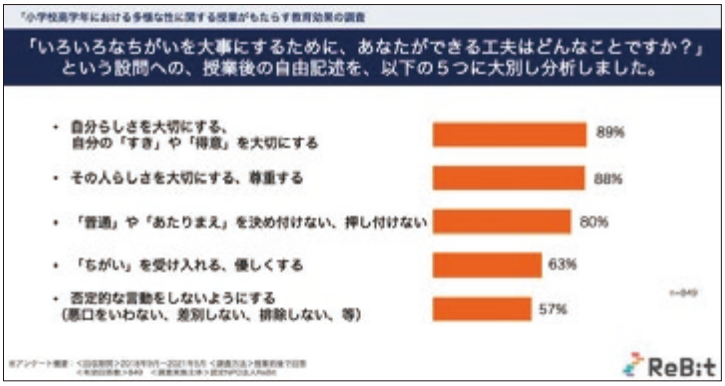


図　認定特定非営利活動法人ReBit（2021）「小学校高学年における多様な性に関する授業がもたらす教育効果調査」

子どもたちから「自分のふつうと他者のふつうは違うことが分かったので、周りを気にするばかりではなく自分の意思を大切にしたい」という感想をよくいただきます。子どもたちの変化を見た先生から教員向けの研修を依頼されたり、「子どもたちに多様な性を伝えるのは難しいと考えていたが、大人が考えすぎていただけかもしれない」という声をいただいたりします。子どもたちの変化が大人たちへ波及していると感じます。

木村　ＧｉＦＴの教育活動には協働・共創、社会参画・貢献の四つの柱があり、特に自己理解・受容、他者理解・受容を大切にしています。どんなテーマでも、まず「自分はどんな人か」を問います。そして、自分の判断で自己開示しながら対話し、深いレベルで相手を理解する機会を持つことで、多くの気付きを得ます。

ワークショップの参加者から、「自分自身に対する見方が変わった」という声をよくいただきます。「自分はどうありたいか、他者に対してどうありたいか、自分の内面に問いかけ続け、相手の考えに耳を傾けることで、他者を一面だけで簡単にジャッジしなくなった」という感想はとてもうれしいです。

誰も傷つかない、取り残さない授業の工夫

木村　中島さんに伺います。ＲｅＢｉｔでは教材開発をされていますが、有効に使ってもらうためにどんなことを意識していますか？

中島　ありがとうございます。お話ししたいと思っていました。先生自身が多様な性について学ぶ機会がなかった可能性を考慮して、教材セットに先生向けのハンドブックを入れていると

木村大輔さん

ころがポイントです。「一緒に学びましょう」から始めないと、授業によって誰かを傷つけてしまう恐れがあるからです。例えば、「この教室内にもLGBTQの人がいるかも」と安易に発言してしまうと、当事者探しが始まるかもしれません。また、よかれと思ってとある有名人の名前を出して話をすると、その人が築いたイメージやテーマに引っ張られて、大事な部分が抜け落ちてしまうことも考えられます。

ですから、まずは先生がLGBTQや多様な性について理解を深められるよう、ハンドブックを読んでいただきます。また、指導の手引きも用意し、授業中に子どもたちから差別的・否定的な発言があった場合の対応方法などを載せています。まず先生が学んで、リスクも知った上で使っていただけるよう工夫しています。

もう一つ、一度授業をして終わりではなく、学級・学校づくりや子どもたちとの信頼関係構築などを踏まえた長いスパンの中で、教材を使ってほしいという思いがあります。

そのために、今日から取り組めることのリストや、子どもからLGBTQなどに関する相談を受けた際の対応などもハンドブックに載せています。授業をきっかけに、継続して多様性の理解を深めていただける教材にしています。

木村　教材を作って終わりではなく、どのように使ってもらうかが重要なので、仕掛けや工夫について聞けてとても参考になります。私も普段気をつけていても配慮に欠ける言動が出てしまうことがあるので、注意すべき事項や対処法が用意されているのはとても助かります。

中島さんのお話を伺って、生徒や学生に答えのない問いに向き合うことばかりを促して、突き放すだけではいけないと思いました。

中島　正しい知識を教えるというのではなく、思考を働かせることを起点に、多様性に対してアプローチしている木村さんたちの取り組みは、とてもパワフルだと感じます。多様性を考えるというと、知識を学んだり、テーマについて知ったりすることと捉えられがちです。そうではなく、多様性って面白いと思う感覚や、自分の中にある多様性への気付きが生まれると、日常生活でも新しい視点で物事を見てみようとする熱量が育まれると思うのです。

多様性……まずは大人から

司会　多文化共生のために学校でできることについてお話しください。

木村　国際協力機構（JICA）事業において多文化共生の文化をつくるというテーマで研修を担当しています。授業で多文化共生を扱うだけでなく、学校全体でインクルーシブな組織をつくることが大切だとお伝えしています。

例えば、学校の掲示物を工夫したり、図書室に置く本を変えたりといった、多文化共生の推進に向けた、公平で多様性を尊重できる組織・環境づくりを提案しています。

シンガポールのような他民族国家であれば、子どもたちが自分たちの民族衣装を持ち寄って体験し合う授業が行われます。日本では子どもを教材にすることに対してリスクもありますが、互いの違いを体験する学びが前向きに行われることが望ましいのではないでしょうか。

Happy Schools Project[*2]というユネスコ・バンコク事務所主宰のプロジェクトでは、学校がハッピーな場所であるための要素を二十二項目挙げています。ポジティブに協力できる人がい

るか、先生の仕事量は適切で公平か、温かく友好的な学習環境か、開放的で自然のある遊び場が確保されているかなど。そのうちの一つに、多様性と違いの尊重も挙げられていますが、多文化共生を授業で扱うことは、あくまで一つの方法です。学校全体として取り組みをデザインすることが重要だと考えています。

中島　学校全体で文化をつくるというポイントは、まさに多様な性に関するインクルーシブネスについても同じことが言えます。

　ＬＧＢＴＱの授業をしたとしても、毎日の学校生活が「女子なんだから……」「男子は○○しなさい」と言われる環境であれば、授業で学んだことは建前だと捉えられたり、ダブルスタンダードになってしんどくなってしまったりします。学校全体としてどのようにインクルーシブな環境をつくるかが大切というお話には非常に共感します。

司会　最後に、「ＳＤＧｓ×多様性」について今後の展望をお聞かせください。

木村　日本社会は多様性に対してどれくらい柔軟に対応できるかというと、実際なかなか厳しいのは否めません。男女格差はまだ解消されていませんし、年功序列の文化も根強くあるのが現状です。そんな中でＳＤＧｓのような変革ができるかというと難しいと思います。

　ですから、教材を提供する、研修を行うといった現場レベルでの推進はもちろんですが、組織構造を変えるための仕掛けを長期的に行っていくことが必要だと考えています。先生方のキャリアの多様性に応えるような制度設計も望まれます。学校内の人材が多様になるよう、採用やキャリアアップの仕組みなどをアップデートしていく必要があるのではないでしょうか。価値観の変容には痛みが伴いますが、自分の価値観がアップデートされている成長痛だと思っていただきたいです。

中島　共感する部分がたくさんあります。教育について考えるとき、「子どもに対してどうするかでなく、私たち大人がどうするかを考えましょう」と伝えたいです。大人自身が社会や自分の在り方を見直すことが、結果として子どもの生活を変え、子どもたちが育つ環境を変えていくことになると思います。

　学校へ訪問した際に「子どもたちの多様性は大切にされていますが、職員室ではどうですか？」というお話をさせていただきます。子どもは大人同士のコミュニケーションを観察し、学んでいます。大人が多様性を大事にしている姿を見せることで、子どもたちのロールモデルになれると思います。

　アライを育てるために、マイノリティの課題を知ること、困難に向き合っている人を知ることは大切ですが、同じくらい大切なのは、その困難に向けてすでに活動しているアライに出会うことです。「自分もこんな大人になりたい」というモデルがいると、行動しやすくなると思います。ですから、まずは大人のwell-beingが大切ですし、大人同士が多様性を尊重しているということが非常に大事だと思います。

　アライを育てる役割は、学校や先生だけが担うものではありません。学校を取り巻く周りの大人たちが、自分にできることを考える必要があります。学用品メーカーが商品の男女分けを見直したり、ひらがなでしか名前入れできなかったものをアルファベットでも入れられるようにしたりすることが、環境を変え、価値観を変えることにつながるかもしれません。

木村　社会全体で学び続ける必要がありますね。私たちは学校や先生にしてもらって当たり前という意識を変えなければいけませんし、学校には地域の人々や我々のような外部機関をもっと活用していただきたいと思っています。

（取材・文／岡本侑子）

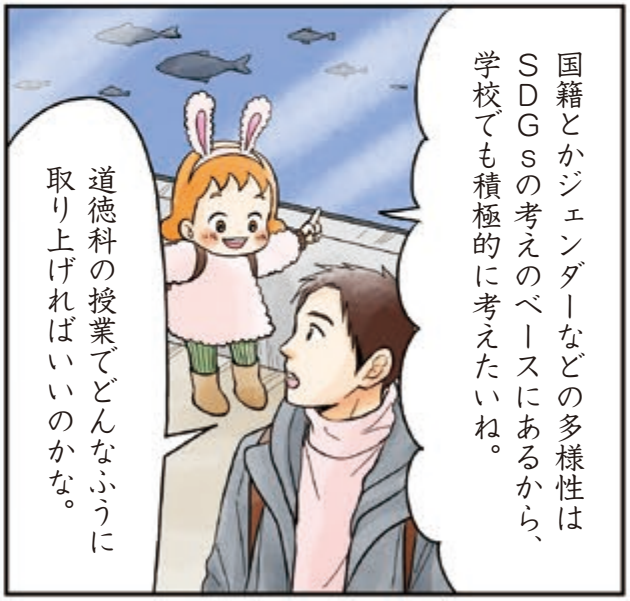
＊1　アライ（Ally）　ＬＧＢＴＱではないが、ＬＧＢＴＱの人たちを支持、支援している人たちのこと。

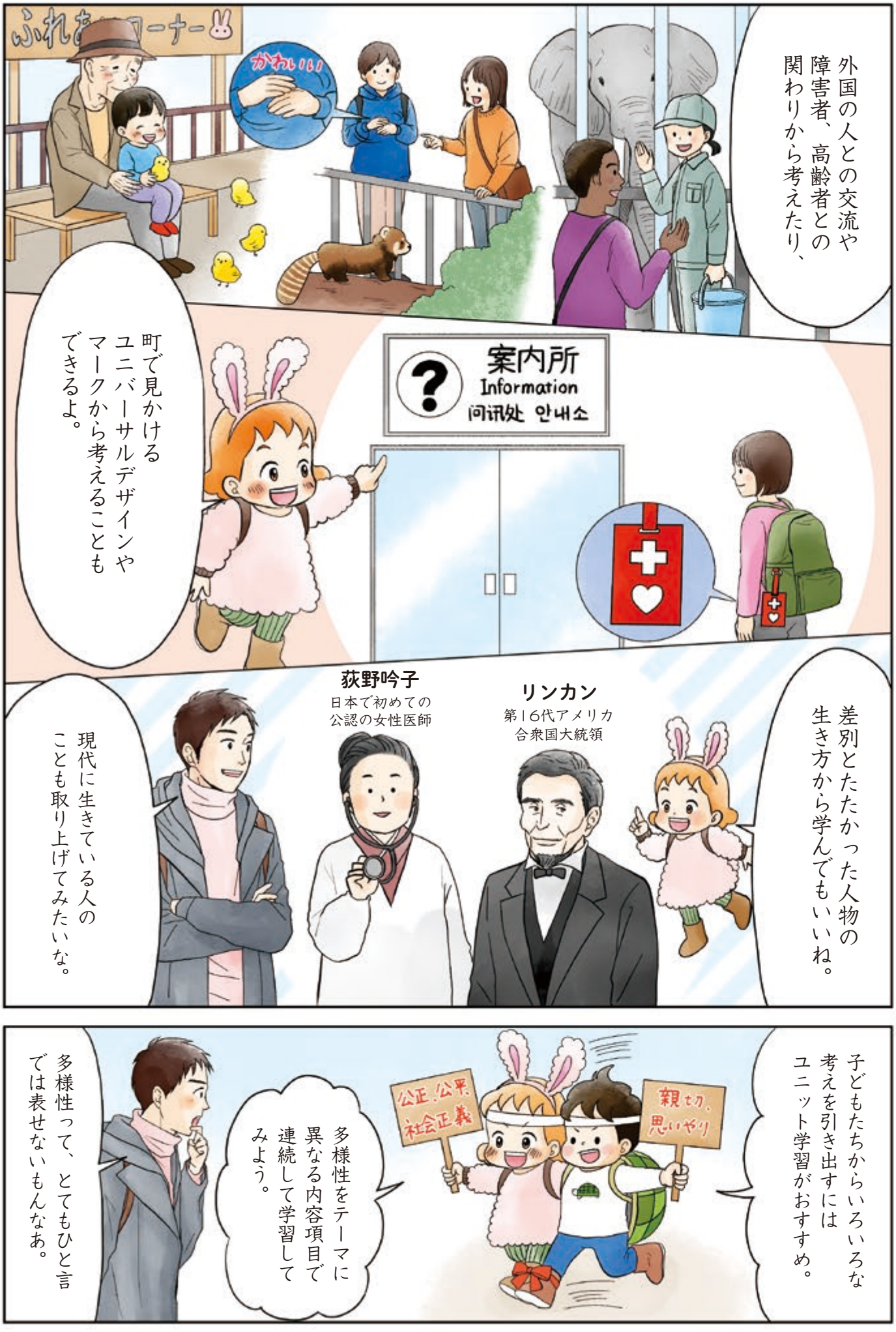
＊2　Happy Schools Project　学校での幸福感を高めることを目的に、二〇一四年ユネスコ・バンコク事務所より発足したプロジェクト。

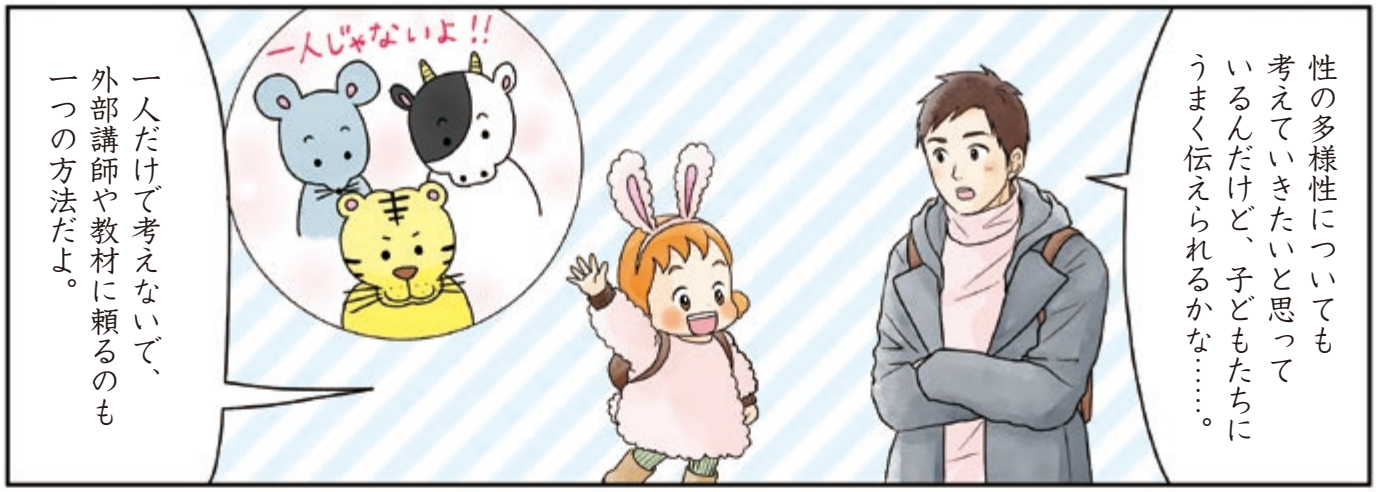
どうなるこれからの道徳授業

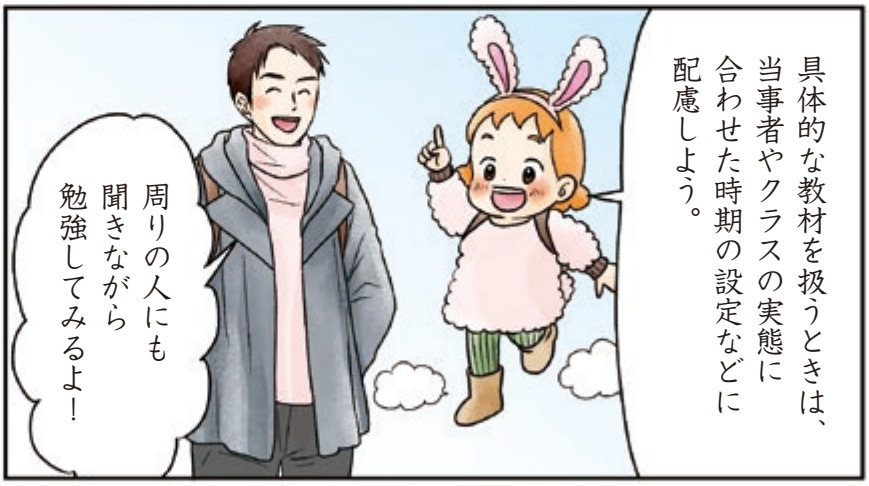
連載18回　多様性編

監修・法政大学兼任講師 廣瀬仁郎先生
マンガ・のはらあこ




外国の人との交流や障害者、高齢者との関わりから考えたり、
かわいい！
案内所
Information
问讯处 안내소
町で見かけるユニバーサルデザインやマークから考えることもできるよ。
差別とたたかった人物の生き方から学んでもいいね。
荻野吟子
日本で初めての公認の女性医師
リンカン
第16代アメリカ合衆国大統領
現代に生きている人のことも取り上げてみたいな。
子どもたちからいろいろな考えを引き出すにはユニット学習がおすすめ。
公正、公平、社会正義
親切、思いやり
多様性をテーマに異なる内容項目で連続して学習してみよう。
多様性って、とてもひと言では表せないもんなあ。





道徳ジャーナル116号 令和5年2月発行
発行所 株式会社Gakken **発行人** 甲原 洋／**編集人** 麻生征宏
本誌のお問い合わせ先…学校・社会人教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8
内容については…TEL（03）6431-1565（編集） **それ以外のことは**…TEL（03）6431-1151（販売）
「学研 学校教育ネット」 https://gakkokyoiku.gakken.co.jp ●『道徳ジャーナル』のPDF版および電子版は、WEBページから。
9300008479

＊LINE 公式アカウントのお知らせ＊
（株）Gakken おんたま先生
体育・保健体育や道徳，特別支援教育，ICT 教育などの最新情報の配信や，
先生のお悩みを投稿できるサービスを提供しています。
友達募集中！
◀QR コードをスキャンすると LINE の友達に追加されます。